



懐かしい故郷の風景（将門神社から南を望む）

陣馬街道

陣馬街道は、八王子市の追分交差点で国道二十号（甲州街道）から西へ分かれ、和田峠を経て神奈川県相模原市緑区に至る街道。山梨県道・神奈川県道・東京都道五百二十一号上野原八王子線の一部。かつて武州案下（現・八王子市内）にちなみ案下道とも呼ばれ、甲州街道の裏街道であったことから甲州裏街道または甲州脇街道とも呼ばれた。陣馬街道沿いの上恩方町などでは、今では数少なくなってしまった田園風景を見ることが出来る。夕焼け小焼けの歌と共に昔ながらの心の故郷を感じさせてくれる場所があり、まるでタイムスリップしているような懐かしさが感じられる。しかし、近年は開発が進み、住宅が立ち並び、里山の風景も変貌しつつある。道中には浄福寺城跡・中村雨紅生誕の地（夕やけ小やけふれあいの里）・陣馬山（陣馬高原）などがある。

◇散歩のみどころ

中村雨紅作詞の「夕焼け小焼け」

の歌で有名な宮尾神社から、大石定久居城跡の浄福寺まで、陣馬街道を下りながら歩く凡そ4kmの行程。

宮尾神社を出て薬師堂へ。途中テキ穴、力石、郷倉、下原刀を造っている佐藤宅を見学。さらに要石、稻荷神社を経て、雨紅の「ふる里と母と」の歌碑のある興慶寺へ。続いて狐塚、菅原神社、大和田刑場跡碑の建つ一刻芸術会館で小休止。さらに駒木野、御嶽神社、佐戸、薬師堂、坂小会館まで歩く。その後、学童疎開の生徒名が廊下の鴨居に残る皎月院へ。ここから大久保に出て、稻荷神社、さらに恩方農村環境改善センターで狐塚遺跡土器の展示を見る。最後に、大永から天文（一五二一〜一五五四）年間に大石定久の居城だった浄福寺（浄福寺城跡）を見学した後に解散。

①高留の宮尾神社

上恩方町二〇八九

祭神 底筒男命・中筒男命・上筒男命・大拘主命・神功皇后・崇徳天皇
創建 元暦年間（一一八四〜一一八五）
再建 明応元年（一四九二）
例祭 九月十日

宮尾山にあつた愛敬山東福院（本山修験）が別当とし、宮尾山上に住吉社を勧請したものと伝えられ、宮尾神社とも高留住吉社とも称していた。明治初年に琴平神社を合祀し、現在の拝殿は、明治中期の建造である。末社に浅間社を祀る。

境内に、当社神官高井丹吾の二男、中村雨紅作の童謡「夕焼け小焼け」の碑がある。昭和三十一年（一九五六）建立である。

新編武蔵風土記稿によると「徐地二十歩、小名愛敬坂にあり、覆屋二間に三間の小祠を置く、南向きなり、別当は本山修験東福院持、神体は木の立像にて長さ二尺許、本地十一面

観音木彫りの坐像長さ五寸許、裏に大永八年（一五二八）八月しもつきと記せり、此像常には別当東福院に置く、社前に木の鳥居を建つ、石段十七級あり、此辺古樹繁茂していかにも古社とみゆれど勧請せし年暦を伝へず」とある。



宮尾神社

●中村雨紅と

夕焼け小焼けの碑

上恩方町二〇八九

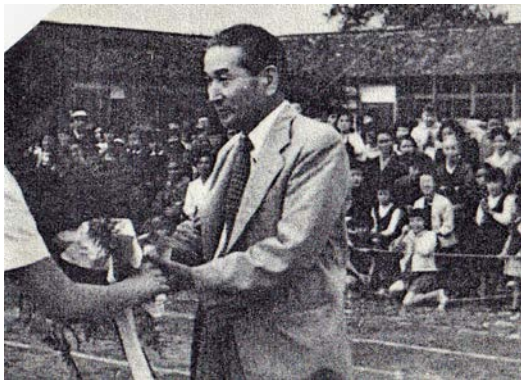
中村雨紅は、明治三十年（一八九七）二月六日恩方村宮尾神社の宮司高井丹吾の二男として生まれ、本名高井宮吉といった。青山師範学校卒業後東京の小学校で教鞭をとる傍ら、大正七年（一九一八）頃から野口雨情に師事して童謡、童話を書き始める。大正十二年（一九二三）「ほうほう」『夕焼け小焼け』などを発表。昭和元年（一九二六）日大高等師範部卒業後、神奈川県厚木の高校教諭となり、昭和二十四年（一九四九）まで勤務した。

「夕焼け小焼け」は、実家への帰り道の情景を詩にしたものといわれて、昭和三十一年（一九五六）還暦祝いに恩方村民が宮尾神社境内に石碑を建立したもの。その後、昭和四十七年（一九七二）観栖寺に「夕焼け小焼けの鐘」の碑を、昭和四十三

年（一九六八）に宝生寺に「夕焼け小焼け」の歌碑、同じ年興慶寺に「夕焼け小焼けの鐘」、四十五年（一九七〇）に「ふる里と母と」の碑が建てられた。
作られた童謡二百六、詩三十三、民謡二十編の多きにわたる作品を残し、昭和四十七年（一九七二）七十五歳の生涯を閉じた。



昭和 31 年ごろの中村雨紅



還暦を祝う厚木東高校の教え子達と
昭和 31 年



妻 高井千代子と

●生家跡の墓碑

上恩方町二二三

中村雨紅の生家は、「夕焼け小焼け
ふれあいの里」の西、高留橋を渡り、
西に曲がった北側の高井家である。
墓碑（墓地）は「ふれあいの里」が
できる前は宮尾橋の北側にあったが、
現在はそれより東側宮の下児童遊園
の南側に移設され「高井家の奥津城」
の中にある。



夕焼け小焼けの碑



子供たちが夕焼け小焼けの歌を歌う
壁画彫りの像



高井家の奥津城

●馬頭観音

上恩方（高留）

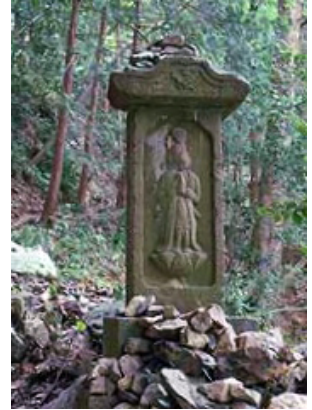
愛敬坂の右側には、像の高さ五九
cmの笠付合掌二手の馬頭観音がある。

寛政十一年（一七九九）五月
金照庵佛傘上人（十二代）
同高留邑 村中

の銘がある。



我によき友ありの歌碑



愛敬坂の馬頭観音

②薬師堂

めみょうぼさつ
(馬鳴菩薩・蚕の神)

上恩方(宮ノ下)

宗派 臨済宗

本尊 薬師如来

開山 興堂和尚

開創 応永二十五年(一四一八)

宮ノ下に興慶寺第三世の興堂和尚が創建したといわれる薬師堂が現存する。堂の本尊は行基作の薬師如来であったが盗まれ、現在は新しい薬師如来が安置されている。

薬師堂の前には、自然石に「馬鳴菩薩」が陰刻線彫りされた明和四年(一七六七)造立の石仏がある。

この菩薩は、養蚕や機織りの神様である。馬鳴とはインドの人で大乗仏教の興隆に貢献した人。その名の由来は、法を聴いて牛馬まで感泣させたことによるといわれる。また、中国の民間信仰には、その分身が蚕になつて人に衣服を与えるとして信仰されたという。蚕の顔が馬によく似ているということからくる説とか、蚕と馬の関係は諸説あるという。

像は右手に数珠を持ち、左手に宝珠を持つて仏法を説く姿を表している。その左脇に、弘化四年(一八四七)銘の二十三夜塔がある。下弦の月の出を待つ行事、二十三夜の月待ち塔である。この夜は三体の菩薩が現れ、一度に拝めるといわれ、収穫を祈願する原始信仰がある。

また、薬師堂の前に二基の板碑があり、元徳二年(一三三〇)と貞治六年(一三六七)の銘がある。



馬鳴観音と二十三夜塔



薬師堂



薬師堂前の板



馬鳴（めみょう）菩薩
左は拡大したもの



③テキ穴

上恩方（宮ノ下）

陣馬街道の力石バス停から二百
m 程行くと左へ入る農道がある。農
道の左に小高い丘があり、以前は薬
師堂があったという。

薬師堂跡の直ぐ下に「テキ穴」と
いわれる穴が残っている。直径は約
一・五 m、深さ二 m、更に底から横
に五 m 程掘られているという。この
穴は昔からあったらしいが、何時、
だれが、何のために使用したか定か
ではない。ただ地元の人の話では、
八王子城へ伝令に飛んだ折の隠れ穴
ではないかという武者隠し説。こう
した穴は八王子城の周辺や滝山城に
幾つかあるのではともいわれている。
また、繭の種（卵）を保存していた
との説もあるが定かではない。
今は周りを木の杭で覆い、蓋は丸
木で覆われ危険防止のため入ること
はできない。



テキ穴（武者隠し）

④力石

上恩方町（力石）

力石とは上恩方町の旧小名で同町の中央部北寄り、狐塚と高留との間にあり、北西は白沢の奥、不動山から高丸嶺までを含む地域である。「力石」という地名は土地に住む小林家の裏庭にある石からつけられたといわれている。



力石と祠

●力石の伝説

上恩方（力石）

昔、石を八幡様へ移したが、村中病気をしたので、元のところに運びおろしたという。この石は男石で、地下一丈（三m）のところに女石があり離れることを嫌ったのであると云われている。この石は重かるうと思つて手をかけると軽く、軽いとあなどつて持ちあげると重くなるといわれている。

⑤力石地区の遺跡

上恩方町（力石）

昭和六十三年（一九八八）力石から小津町西沢への農道の開設にあたり、市教育委員会の事前調査の結果、縄文時代早期頃と中期の住居跡四棟、炉穴五十四基、陥し穴十一基などの遺構、遺物が発見された。場所は、白沢の東側の上位段丘面。案下川か

らの比高は約二十mにある。下位段丘面にあたる旧道北側の畑からは、黒曜石等の石器の破片が数多く出土している。

●要石

上恩方町（力石）

力石に「椿山の要石」という石が、土地の山室家の裏の畑にある。直径八〇九寸（約二十六cm）で頭の丸い、地上一尺（約三十cm）ほど出た石で、所有者が四、五尺（一・三m）下まで掘ってみたが底が知れなかったという。それをそのまま埋めて大切に保存している。伝説によると、この辺は地震の通り道にあたっていているので、要石は地下にいる鯰（なまず）の頭を押さえているのだといわれている。

●平将門神社と草木家



椿山の要石

上恩方町（力石）

平将門は、平安中期の武将で桓武平氏、鎮守府將軍良將の子である。下総（千葉県）を本拠とし、幼時は京都で藤原忠平に仕えた。父の遺領問題などで一族と争い、伯父国香を殺して関東に勢を振り、国司に抵抗する土豪を扶けて常陸国府を焼討ち、王城を営み自ら新皇と称した。朝廷は追討軍を派遣したが、その到着前に、将門は、国香の子貞盛と藤原秀郷に滅ぼされた。

将門は倒れたが、勝利を得たのは中央の権力者藤原氏ではなく、在地の豪族たちであった。以後将門の乱

は関東の武士や農民の心に残り、各地に将門伝説が作られていった。

力石の将門神社は平将門を祀っている。伝説によれば、草木家は将門の家臣で、家系図や将門着用の際羽織、黄金造りの太刀、鎧（あぶみ）が残されている。天慶の乱の時、草木兵部は主君危うしの報せにより出陣したが、狐塚の境まで来た時「将門討ち死に」の報を受け、馬をひき廻し、槍を側の渕へ投げこんだという。それ以来、そこを「ひん廻し」「槍小渕」とよんでいる。

旧名主の草木家には、代々伝わる千七十七点に及ぶ草木文書があり、近世の村方文章としてよく揃っているという。特に宗門改帳や助郷、村況村政はまとまっていて、元禄八年（一六九五）の村絵図は、横に数メートルもあり、家々が一軒一軒記入してある。これは柏の葉が村の産業だった頃、上恩方村と下恩方村が入会権で争っていた頃の代官に示した絵図であるという。



本 殿



平将門神社

●草木家付近の石造遺物

草木家の西側旧道に石造物が並んでいる。北側から元禄十二年（一六九九）銘の自然石陰刻線彫りの「地藏菩薩像」、時期不明の「萬霊塔」、慶応四年（一八六八）銘の「二十三夜塔」、安永二年（一七七三）銘の「念仏供養塔」、明和三年（一七六六）銘の「馬頭観音」、天保六年（一八三五）銘の「石燈籠」などの六基の他に、力石橋の南側に年代不明の「三界万霊塔」、白沢川の西に不明な「地藏」、宝暦五年（一七五五）銘の「巳待供養塔」、自然石の塔が二基並んでいる。



旧道にある石造物

●腰越の馬頭観音

第二中村農園（高台上）に、馬の文字を馬の姿に模した文字塔観音は明治十年（一八七七）、右側は文字だけの明治十三年（一八八〇）銘の馬頭観音が建っている。



巳待（みまち）供養塔など

●郷倉

こうくら

江戸時代の寛政改革により幕府の飢饉対策として、囲米（かこいまい）制度ができたが、上案下地域は米がほとんど収穫できず、稗（ひえ）を出しあつて貯蔵していた。稗が訛（なま）って「ひえこく倉」とか「へえこぐら」などと呼ばれていた時期があった。もとは力石橋の西にあったが、今では土地の塚本家の敷地内に移されている。記録によると天保四年（一八三三）上恩方村は稗の貯蔵



馬頭観世音

が五十五石とあり、その当時の記録が草木家に残されている。天明八年（一七八八）から寛政二年（一七九〇）、寛政八年（一七九六）、天保九年（一八三八）の記録帳が計八冊あり貴重な文化財である。



郷 倉

⑥浅川稲荷社（狐塚）

上恩方町（狐塚）

元禄七年（一六九四）の棟札のある稲荷社で、案下川は字川（あざがわ）とも浅川ともいわれた。ここは上代麻川といわれた名残りであるといなので、この名で使われている。



浅川稲荷神社



狐塚本殿内

●狐塚遺跡

上恩方町（狐塚）

昭和四十二年（一九六七）三月恩方中学校の社会科学クラブが高校生の応援を受け、興慶寺の裏から流れ出る堀の北側「池の平」と呼ばれる付近を発掘調査した結果、縄文時代中期の住居跡三棟、縄文早期、中期、後期にわたる、八十四個の土器と百点に及ぶ石器等が発見された。出土遺物は、縄文土器、打斧、石鏃、尖頭器、石匙、削器、敵石、土製円板、石製垂飾、搔器、青磁器などが出土し八王子郷土資料館に保存されている。

昭和四十四年にも黒沼田（くるみだ・くるみた）遺跡が発掘されている。

●狐塚の地名縁起

上恩方町（狐塚）

上恩方の興慶寺の下から都道にまでひろがった耕地がある。昔、この耕地の一隅に、狐がすんでいたという塚があつたという。地名の由来はここから起こったといわれている。今は壊されて跡方もないが大正末期から昭和初期ごろ大きい塚があつたといわれている。

⑦萬蔵山興慶寺

上恩方町一〇四〇

宗派 臨済宗南禅寺派

本尊 地藏木造坐像（金色の地蔵）

開山 峻翁令山和尚

（勅諡名、法光院融禅師）

開創 至徳元年（一三八四）

山田の廣園寺を開山した峻翁令山和尚が創建。本尊は座高四十五cmの木造の地蔵で、本殿の中に四重の

台座に置かれている。新編武蔵風土記稿には、本尊の高さ八寸（二十四・二cm）とある。

前身は、江戸時代の堂で、白沢という所に恭翁運良上人が永仁五年（一二九七）白沢庵という名の小庵を草創したもの。これを峻翁令山が当地に移し興慶寺を創建したものである。本堂は八間に六間半の南向きで、山腹にあり寺領十石の朱印を賜わる。

寺地に四間と三間の薬師堂があり、本堂の右手山上には宝暦二年（一七五二）銘の加藤重兵衛藤原吉政作の鐘楼があつたが、戦時中に供出されたという。現在の梵鐘は復元されたものである。



興慶寺

● 「ふる里と母と」の碑

上恩方町二〇四〇

興慶寺境内鐘樓の登り口に中村雨紅の書による「ふる里と母と」の詩を刻んだ歌碑がある。

ふる里と母と

作詞 中村雨紅
作曲 海沼 実

今も帰ればふる里の
岡に残るよ今松よ
村のはずれの閻魔堂
ねんねこさらさるとんとり
川の瀬音も子守歌
おいしそうでもへび苺
きれいな実でも牛殺し
その葉取るなよ実をとるな
いつもやさしくあたたかく
今も聞こえる母の声

雨紅 書



梵 鐘



「ふるさとと母と」の碑

⑧菅原神社

上恩方町（黒沼田）

勧請 橋本家

祭神 束帯の坐像

創建 文明二年（一四七〇）

上野国（群馬県）寺尾城主、新田義重の六代目の子孫が相模（神奈川県）に住み、その子孫から四代目の人が黒沼田（八王子市上恩方町）に永住した。その子孫が土地の旧家橋本家の家族たちである。橋本家の祖先が文明二年（一四七〇）三月、山頂に菅原神社を創建。その後、元禄元年（一六八八）現在地に移したといわれている。

御神体は束帯の坐像、長さ八寸（約二十四・二cm）。覆屋は二間に三間、小祠を置く。南向きで除地四坪、石段は三十三級と新編武蔵風土記稿に記載がある。



本 殿



菅原神社

赤渕という所の出口に湿地（ふけ）があつて、猪が泥の中を、ぬた打ち廻った「ぬた場」であるといわれる。

土地の老人は、「黒沼田（くるみだ）」を「くろぬた」といつている。これがいつしか「くるみだ」の語源になつていったという。

● 黒沼田の地名縁起

くるみだ

上恩方町（黒沼田）



仏に祈る夫婦

⑨ 大和田刑場跡碑

上恩方町五五六〇二

一刻芸術会館の駐車場の隅に「南無妙法蓮華經法界萬霊供養塔」が建っている。この供養塔は、大和田町の浅川辺りにあつたもの。高尾山の麓に移したが、圏央道の道路工事により、上恩方の現在地に移され供養されているという。土地の古老によると、水死者か刑場の刑死者か不明だが「萬霊」と書かれているので合葬供養と見られるということである。

一刻芸術会館は、平成二年（一九九〇）七月十五日開館。木彫作家、田中一刻氏の一刀彫仏像作品二十体ほか、古美術品や木彫用道具類などを展示している。今は若女将が喫茶店を経営しており、旅の疲れを癒してくれるという。

この碑は、江戸時代に八王子の犯罪者が処刑されたことを供養するために旧紙工工場内に建てられたもの。工場内での事故が多かったが、この

碑によりめっきり減少したと云われている



大和田刑場跡の碑

⑩ 庚申塔と山王様

上恩方町（黒田沼）

庚申塔は、安永二年（一七七三）十一月銘の青面金剛笠付合掌六臂像で、像高七十一cm、台座に竹の枝で遊ぶ猿二匹が彫られた珍しいものである。山王様は、庚申塔の北側、長泉寺（廃寺）持であった。新編武蔵風土記稿に「徐地三間に十二間許り、小名黒沼田にあり、小祠南向きに立つ」とある。



地藏様



庚申塔

⑪ 稻荷神社

上恩方町（駒木野）

元文年間（一七三六〜四一）の鰐口があるといわれる。明治四十年（一九〇七）銘の大鳥居があり、境内には妙法二天が祀つてある。明治初年までは大樺があり、駒木野集落の半分は日陰であったという。入口道路の北側に明和二年（一七六五）の地藏と、首の欠けている年代不明の地藏の他に、寛政六年（一七九四）の庚申塔笠付青面金剛六手がある。



稻荷神社本殿



庚申塔 青面金剛



奉納された狐群

●駒木野の地名縁起

上恩方町（駒木野）

むかしは「小牧野」と書いたともいわれるので、牧野の跡かとも考えられたが、採薪地名の細木（こまぎ）で、柴、粗朶（そだ）のことで、コマギを採集する地から名がついたともいわれる。いずれも定かでない。

⑫御嶽神社

上恩方町（佐戸）

新編武蔵風土記稿によると、「徐地百六十坪小名佐戸にあり、石段四十二級を登りて小社を立つ、覆屋一間と二間南に向へり、神体は銅の立像長七寸例祭は二月八日なり」とある。

⑬路傍の石造物

上恩方町（佐戸）

駒木野橋の東石垣台地上に、天保十五年（一八四四）十一月銘の三面六手の馬頭観音と時期不明の地藏が覆屋のなかに祀られている。また、「佐戸」バス停留所から西へ約二十mの道路北側に安永二年（一七七三）九月銘の庚申文字塔がある。

板当橋を渡り、旧道を山沿いに東へ進むと文政十年（一八二七）の二十三夜塔と時期不明の石祠が祀られている。少し東へ進み大久保の集落



御嶽神社

に入る辻に、天明四年（一七八四）十月銘、高さ八十二cmの庚申塔（平頭角柱文字塔）がある。旧道を更に東へ進むと左側の稲荷神社入口に地藏三体が覆屋のなかに祀られている。宝暦四年（一七五四）銘一体と不明像の二体である。左側奥に、大久保の稲荷神社がある。享保十一年（一七二六）創建とあり正一位の神階は文化八年（一八一）に受けとったといわれている。神楽殿も境内にあり、神殿裏を流れる北浅川近くに山王社の小祠が祀られている。道路南側に和歌山県新宮熊野速玉大社から勧請した熊野神社があるが創建年代は不明である。



旧道の石造物

●佐戸と小高井の地名縁起

佐戸と小高井の集落は地続きで、地方の方言が訛って地名となったもののなかは不明である。佐戸は秋田方言のサド（堰）であろうといわれる。ここから取り入れる用水が小高井の水田を潤していたが、今は堰の痕跡はない。

小高井はコダケー（栃木方言）で用水堀の水量調節の水落としのことであるが、これが地名になったと考えてよいのかどうか不明である。



北浅川に架かる珍しい木橋

⑭板当の薬師堂

上恩方町一五七

恩方中学校バス停前に板小会館がある。その会館の南側に、薬師堂がある。屋根は茅葺きで、今はその上をトタンで保護している。地主の大塚家が堂守をしている。

堂内の奥中央には高さ三十cm程の金箔に包まれた薬師如来坐像が安置されている。薬師如来の周りには、高さ二十cm程の十二神将が整然と安置されている。いずれも鎌倉か室町の作ではないかといわれ、都の文化財に匹敵するものだという。



庚申文字塔

また、目の病を治すために奉納された沢山の絵馬や本堂正面の軒の下には俳句の連歌と思われる大きな扁額がある。その他、サス梁と両側にある柱に付ける飾り物もある。

さらに、お堂の脇に高さ一m程の地の部分に「菊」の紋章が刻まれた丸五輪塔、畑の中央には鬼門石といわれる石もある。



薬師如来と十二神将



柱の飾り物

目の病を治すために奉納された絵馬



薬師如来像



丸五輪塔に刻まれている菊の御紋



丸五輪塔



地蔵様



鬼門石

●板当の地名縁起

上恩方町の東端で旧小名、小字名で板当（いたあて）という。北浅川の南岸で板当川の流域にあたる。

武蔵名勝図会によると「小名、板当は古之家建（いたて）の転じたるなり」とある。むかし武具の一つである楯（矢受け）の板を、この地から切り出したところから板当（いたわり）の地名が起ったともいわれている。

⑮常圓山皎月院

上恩方町九

宗派 曹洞宗 心源院末

本尊 釋迦牟尼仏如来

開山 玉田存麟大和尚

開基 大石遠江定久

開創 天正四年（一五七六）

皎月院は古く室町時代の文明年間（一四六九〜八七）ごろ曹洞宗の僧侶が庵を開いたことにはじまる。

開山の玉田存麟和尚は天正十四年（一五八六）寂。

開基の滝山城主大石遠江守定久の法名は「皎月院殿英岩道俊居士（大石道俊）」。

本尊の釈迦如来坐像（寄木造）は、像高二十八cm、膝張二十二・五cm、江戸期に御朱印五石を拝領した。

明治二十八年（一八九五）頃焼失し、その後再建された。また戦時中は学童疎開の施設にも使用されていた。多くの土地を八王子市に寄付した。昭和二十二年恩方中学校が設立。境内は大石定久の邸宅跡と伝えられていて、庭の桜は有名な名木である。



皎月院本堂



学童の名前



本堂鴨居にある学童の名前

●草木兵四郎 頌徳碑

けんとくひ

皎月院隣の広場に、草木兵四朗翁頌徳碑がある。

草木兵四郎は、弘化三年（一八四六）六月、恩方村の素封家に生まれた。資質は、温厚で、若いころから公共事業への志が深かった。浅川の洪水で悩まされていた案下路（陣馬街道）の改修工事に着手し、大久保新道を造った。私財を投じて力を尽くした結果、明治二十五年（一八九二）十月十日、遂に完成をみた。頌徳碑は、彼の功績を称え昭和二十八年（一九五三）年六月に建立したものである。

また彼は、明治三年（一八七〇）七月には、交通不便な土地であった恩方村力石に、馬車による運送業を開始した人物でもある。恩方地区の、生活の諸物資の搬送と利便性に力を尽くした先駆者であった。

⑩旧道の石造物

下恩方町（大久保）

大沢橋を南に行くと東大沢橋に出る、ここを東に進むと松竹の河川敷を横切る旧道があり途中に幾つかの石造物がある。

宝暦四年（一七五四）銘の庚申塔（青面金剛像）以外は年代不明である。馬頭観音二手立像（壊れている）、地藏（不詳）、石塔の一部（不明）等が立ち並び旧案下道の面影を残す貴重な石造遺物である。



草木兵四朗翁頌徳碑



地蔵様



石造物

⑰稲荷大明神

下恩方町(大久保)

文化八年(一八一二)正二位の神階を受けたとの伝承。享保十一年(一七二六)の創建。



稲荷大明神

⑱熊野神社

下恩方町(大久保)

和歌山県新宮の熊野速玉大社を勧請。年代は不詳。



熊野神社

●大久保の地名縁起

下恩方町(大久保)

大久保の地名縁起について、ふれている文献は見当たらない。上恩方に森久保という集落があり、「くぼ」とは山間地の中の平地の意であり、必ずしもへこんだ所(くぼち)とは限らず、山間地から平野に出る扇状地に連なる比較的広い平地となっているこの地を「大久保」と名付けたのではないかと考えられる。

⑲千手山普門院浄福寺 都

下恩方三二五九

宗派 真言宗智山派
本尊 大日如来
寺宝 千手観音像
開山 広恵上人
開創 文永年間(一二六四〜七五)
武蔵名所図会よると千手山普門院浄福寺は、真言宗京都醍醐報恩院

末であるとされている。当初は「城福寺」と呼んでいた。現在、本尊は大日如来であるが、往古は不動明王であったという。

本堂裏手に観音堂が建てられ、その中に千手観音像が祀られていたが、大永四年（一五二四）上杉憲政の兵火によつて焼失した。当地に城を構えていた大石定久、憲重父子は上杉勢のために一時退いていたが、翌大永五年（一五二五）には再びこの地に帰り、堂を復興し寺を再建したと伝えられている。

街道に面して枡形と伝えられる方形に囲った石垣があり、上段に本堂、庫裏が配置されている。裏山の浄福寺城との関係からも大石氏の館跡の可能性がうかがえる。

昭和三十七年（一九六二）三月三十一日、東京都の有形文化財に指定された観音堂の厨子は、大永五年（一五二五）頃の製作といわれている。

一間厨子、寄棟造の板葺きで、室町時代の様式をよく伝えている。本尊

の千手観音像も室町時代の作である。素木像で目に彩色がある。頭部化仏は柄穴（ほぞあな）差し込みでいくつかを欠き、脇手は直接釘付けしているが多くを失っている。像高六十八cm、十一面四十二臂の千手観音で、蓮台の下に台座がある。台座は天文十一年（一五四二）造立の相模大山西の不動明王像の台座であったものである。現在不動明王像は不明である。



都重宝 浄福寺観音堂内厨子



板葺き厨子と千手観音



浄福寺本堂

●三十三観音

観音堂へ上がる参道に、三十一体の聖観音菩薩像が建立されているが、これに加えて東京都指定文化財、宝厨子内の「千手観音」と観音堂内の唐金造の「聖面観音」で三十三観音と説明されている。



昔話で知られる暴れ絵馬



聖観音像



白山神社

●白山神社

下恩方町（浄福寺境内）

新編武蔵風土記稿に「本堂に向かつて左にあり、小社なり境内鎮守なり」とあるが、現地には、白山大権現と表示されている。これは神仏習合時代の呼び方と考えられる。加賀白山の霊山信仰で、白山比咩（はくさんひめ）の大神が祭神で養老元年（七一七）頃盛んであったといわれている。覆屋の中心に白山社があり、両脇に小祠が祀られている。

この一つが、新編武蔵風土記稿に見える天神社かとおもわれる。覆屋前に一対の火袋欠如と思われる石燈籠があるが、これには金毘羅大権現、文化八年（一八一二）と銘がある。



白山大権現

●浄福寺城跡

下恩方町（大久保）

浄福寺裏山一体は浄福寺城といわれている城郭遺構である。昭和五十九年（一九八四）八王子市教育委員会によつて遺構確認調査がされ報告された。これによると主廊部を中心として放射線状に伸びた尾根上の遺構をもとに、規模も大きく構造や残存状態などから貴重な中世の山城跡であることがわかってきた。

この城は、十四〜十五世紀初頭に大石信重により、甲州口の押え等を目的にその前身が設定されたと思われる。大永から天文年間に大石定久が居城として用い、現在残存する城跡の基本的な城域が設定されたと考えられる。定久在城期からその直後にかけては憲重が一時在城していた時期や、北条氏照の治政期にその支城としての改修がなされたと考えられる。

浄福寺のある地は、佐野川往還という甲斐国（山梨県）に通ずる大事な幹線道路に接し、戦国期には政治的、経済的、軍事的にみて重要な位置を占める場所である。大石氏は長期にわたつてこの城を活用し、氏照も滝山に入る前にここにいたといわれている。八王子城築造時にもここが使用されていた事も注目されている。城の名も「新城」、「千手山城」、「松竹城」、「案下城」、「由井城」とも呼ばれ、構造からみて東側山麓部が城下であり、そこからのルートが大手道であると考えられている。城下の一角と推定される上宿地域の遺跡調査の結果から幅約四m、深さ約一mの溝が検出され、十五世紀末から十六世紀前半の遺物も出土し、東側四kmの場所にある由井八日市の市場との関係なども注目されている。



浄福寺境内



浄福寺跡・山頂（現在は祠のみ安置）

◎参考資料

- ・新編武蔵風土記稿
- ・八王子事典
- ・八王子市史
- ・八王子寺院めぐり
- 八王子仏教協会青年部
- ・八王子市郷土資料館資料
- ・橋本文書
- ・案下路を歩く会
- ・八王子ふるさとのむかし話
清水成夫著
- ・歴史と浪漫の散歩道
- ・八王子観光エリアマップおんがた
- ・多摩の文学碑
- ・恩方村の伝説
塩田真八著
木下 正著
- ・多摩名義考
- ・中村雨紅詩謡集
- ・ふるさと八王子
- ・インターネット各ページ
- ・昭文社地図
- ・八王子市地図
- ・八王子市観光マップ

メモー